

ありのままの君を受け入れる新たな形 ～不登校特例校 岐阜市立草潤中学校の挑戦～

岐阜市教育委員会 学校指導課

1 はじめに

本市では、全国学力・学習状況調査に見られる高い学力を保持する一方で、不登校児童生徒の増加が大きな課題となっている。特に、中学校においては、この傾向は顕著であり、根本的な解決策が求められている。

2016年度末の「教育機会確保法」の施行を受け、本市では2018年度に、旧徹明小学校の跡地活用を視野に入れ、他市の特例校を視察しながら、不登校特例校の基本方針案を作成し、開校に向けた具体的な準備を始めた。2019年度には、基本方針を決定し、文部科学省より「教育課程特例校」の指定を受けた。そして、2020年度には、教育委員会内に不登校特例校設置準備室を設け、環境整備に取りかかるとともに、大学教授、小児科医師、先進校等から様々なご示唆をいただいた。さらに、学校説明会や個別面談等を実施し、転入学生徒40名（1年生：13名、2年生：12名、3年生：15名）を決定した。

こうして2021年4月、東海地方初の公立不登校特例校「岐阜市立草潤中学校」が開校した。草潤中学校の校名は、中国の戦国時代の儒学者「荀子」の言葉「内に素晴らしいものがあれば、いつかは外にあらわれる」という意味から、「草潤」と名付けられている。

2 草潤中学校における特別の教育課程

草潤中学校のコンセプトは、「学校らしくない学校」である。これまでは、生徒が学校のシステムに合わせてきた。毎日決められた時間に登校し、決められた教室の決められた座席に座り、決められた教科の学習を皆と一斉に受けることが生徒にとって当たり前となっていた。こうした学校の仕組みは、多数の生徒を効率的に指導するためには有効な仕組みにちがいない。

しかし、そういった学校らしい仕組みに順応できず苦しみ、不登校になっている生徒がいることも事実である。草潤中学校は、学校が一人ひとりの生徒に合わせることを目指し、「ありのままの君を受け入れる新たな形」というキャッチフレーズを掲げている。その具現を目指した特別の教育課程について、以下に述べる。

(1) 生徒個々の状況に合った学びのスタイル

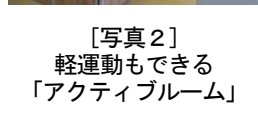
草潤中学校では、家庭学習を基本とするモデル、週に数日登校するモデル、毎日登校するモデルを参考にして、生徒が自分に合った学びのスタイルを柔軟に選んでいる。

現在に至るまで、平均して毎日約7割の生徒が登校し、登校していない生徒の約4割がオンライン授業に参加している。草潤中学校では、登校させることが主目的ではないが、いつでも、どこにいても、一人ひとりに学びを保障することができるような支援を心がけている。また、校内に様々なタイプの生徒に合った安心していられる居場所を各所に配置し、ありのままの自分でいられる環境をつくっている（写真1、2）。

なお、草潤中学校では、「学級担任制」ではなく、生徒一人ひとりが担任を自分で選ぶ「個別担任制」を採っている。学校生活を送る中で、自分が最も相談しやすい先生を、5月半ばに生徒自身が決めている。



【写真1】
個別学習ができる
「Eラーニングルーム」



【写真2】
軽運動もできる
「アクティブルーム」

(2) 1日の学校生活の流れ

草潤中学校は、岐阜市全体を通学区域としており、通学生徒の健康安全に配慮し、一般の中学校より遅い時刻を始業とし、早い時刻を終業としている。通学手段は、徒歩または自転車、公共交通機関を利用している。保護者による送迎も可能である。

まず生徒は、9時35分に登校した後、前述の個別担任の先生と「ウォームアップ」に取り組み、1日の学習内容と場所を自分で決めるようにしている。生徒は毎時間、自分が決めた場所で学習に取り組むため、「イマここボード」(校舎図等が掲載されたボード)に事前に自分のネームプレートを貼るようになっている(写真3)。巡回当番の先生は、それを見て、実際に生徒一人ひとりの所在を確認している。給食はなく、弁当を持参するか、業者の弁当を注文することができる。もちろん弁当を、どこで食べるかも自由である。また、みんなで一斉に取り組む掃除はない。



【写真3】イマここボード

最後に、個別担任の先生と「クールダウン」に取り組み、1日の自分の学びを振り返ることができるようにしている。そして、14:35には下校する。昨年度の後期には、生徒からの要望によって放課後に1時間、学校に残って学習をすることができる「放課後学習」の時間を設定した。学校生活全般において、安全や公衆衛生に関わること以外に、強制することはしていない。服装、持ち物などで、細かな規則はない。また、一般の学校にある「運動会」「文化祭」等の既定の学校行事はないが、生徒の願いや思いを受けて、必要な行事等がある場合、生徒と先生で相談して企画・運営している。

(3) 個に応じた指導と評価

一般の中学校では、1年生から3年生まで、年間1,015時間の授業を行っているが、草潤中学校では、全学年とも年間770時間の授業を行っている。学年ごとに基本的な時間割は設定しているが、一人ひとりのニーズに応じて、個別に学習内容を相談し、一人ひとりのよさと可能性を伸ばすことができるようにしている(写真4)。また、定期テストについては、希望者を除いて一斉に実施することはない。



【写真4】

音楽、美術、技術・家庭の学習の中から、自分の興味・関心のあることに取り組む「セルフデザイン」

こうしたことを踏まえ、通知表の様式は、生徒・保護者・学校の三者面談で決定している。「通常の学校のように5段階の評定をしてほしい」「今は学び直しだから通常の評定ではなく、学習状況等を文章で評価してほしい」など、全校生徒一人ひとりに応じた通知表を作成している。

(4) 転入学生徒以外の不登校支援

草潤中学校が目指す学校の実現に向けて、文部科学省には定員40人として申請し、各学年13人程度とした。2020年度の開校前の学校説明会には、児童生徒222人も希望者が参加したことから、教育委員会では、定員40人に加え、在籍校に籍を置いたまま支援する新たなシステムを2つ導入した。1つ目は、在籍校に籍を置いたまま週1日登校して50分個別の学習相談等をする通級支援コースである。2つ目は、週1~2回オンラインで個別の学習相談等をするオンライン支援コースである。その結果、希望者の中から通級支援コース25人、オンライン支援コース25人を支援することになった。

3 おわりに

これまでの学校のシステムに合わせることに疑問を感じ、不登校を経験した生徒のありのままを受け入れる草潤中学校の実践は始まったばかりである。そのような中でも、個に応じたケアや学習環境の中で、生徒は心身の安定を取り戻しつつ、自分の新たなよさと可能性を着実に見出そうとしている。

今後は、草潤中学校で得た実践のノウハウを一般の学校へ普及させることにより、不登校支援の拡大を進めるとともに、個別最適な学びの一層の充実を図る必要がある。生徒が学校のシステムに合わせるのではなく、学校が一人ひとりの生徒に合わせるという在り方が、不登校の解決だけでなく、学校教育全体を改革する「起爆剤」となるかもしれない。そう考えると、草潤中学校は、不登校特例校という枠を超えて、生徒のありのままを受け入れつつ、一人ひとりの「未来」をつくり出す学校の1つのモデルとなるのではないかと考える。